

児童・生徒の「私的生活空間」考

—現代の子供室を見直す—

生活環境デザイン学科 高 阪 謙 次

1. 家庭科における住分野への苦手意識

中学校・高校の家庭科には、衣・食・住・保育・家族・消費生活などの分野がある。このうち「住」については、家庭科教育の現場において、授業展開が難しい領域だという認識があると聞いている。その苦手意識の原因は、次のようなことを挙げることができよう。

- ① 「住」に対する教師サイドの知識不足。あるいは、そうならざるを得ないほどに、この分野が複雑であること。
- ② 衣・食などに比べ、児童・生徒の、あるいはひいては教師の、日常的な関心が薄い分野であること。その関心の薄さの原因のひとつは、「住」の良否による生活への影響は多大であるにも関わらず、そのことが直感的にもデータの的にも把握しにくいことが挙げられよう。逆に、例えば「食」に関しては、その良否の影響は即座に身体に現象してくるし、そのことをめぐるデータも豊富に提供されている。
- ③ 衣・食などに比べ、学習の成果を家庭生活へ還元することが難しいこと。例えば、児童・生徒が自らの住生活の問題点に仮に気づいたとしても、その改善には相当のコストを要する場合が多いこと、など。
- ④ 児童・生徒の住宅と住生活の実態があまりにも多様であり、共通の話題に基づく教育の展開がしにくいこと。例えば、家庭での彼らの私生活的空間は極めて多様であり、子供室などを単純に教材対象にしにくい実態があること。

これらのことから住の分野は、カーテンの開け閉め、収納の工夫などの、いわば当たり障りのない教材を扱うとか、教科書中心の授業展開になりがちである。家庭の住生活の実態に切り込んで、児童・生徒の明日からの「住」の改善につなげてゆくようなものにはなにくく、どちらかという一般論的、理想論的、ないしは傍観者的な授業展開になっている。

2 児童・生徒に「私的生活空間ミニマム」を

家庭科の住教育はこのような現状にあると思うが、他方、児童・生徒の家庭生活の実情を見てみると、「住」について家庭科教育が果たすべき役割は、いま非常に大きくなっていると感じる。とりわけ児童・生徒の私生活的空間をめぐっては、家庭科ないしは学校教育としても、改善に力を注ぐべき時期にきていると思う。

その改善の内容には、柱が二つある。

第一は、児童・生徒の「私的生活空間ミニмум」とでも言うべきミニмум水準を設定し、長い時間がかかったとしても、これを実現してゆくことである。

児童・生徒の、住まいにおける私的生活空間は、いま極めて多様である。そのようなスペースのまったく無い子供から、どこかの片隅に置かれた机がそれに当てられているような子供、部屋はあっても親やきょうだいと相部屋の子供、そして自分だけがゆったり使える部屋のある子供まである。この状況を「食」に例えると、まったくの欠食状態から、栄養不足や偏食の状態、そして逆に飽食で危険な状態の児童・生徒までがいるような状態である。従って家庭科としては、あるいは学校教育としても、この現状を見過ごすことは本来できないはずであろう。

こうした現状の根底の原因は、わが国の住宅政策の基本姿勢が、良い住宅の確保は個人の責任としていることにある。親の経済力によって、子供の私的生活空間のありようが決まってしまうのである。教育の観点からすると、子供の私的生活スペースのこうした状況は、「教育の機会均等」の基盤条件が脆弱であることを示している。

児童・生徒に「私的生活空間ミニмум」が確保されていれば、学校教育、家庭科教育の現場は、それを前提に教育展開ができることになる。そのベースがあれば教育の効果は飛躍的に高まり、子供たちの学力も確実にアップするであろう。

このために学校や家庭科では、児童・生徒の私的生活空間の現状をまず把握することが求める。個人情報保護やプライバシーの問題の検討は必要であろうが、教育の効果的推進のための基礎的な作業としても、これをまず実施すべきであろうと思う。

3. 子供室「聖域化」の弊害

柱の第二は、子供に私的生活空間を与える場合、そこにおける児童・生徒の生活をいかに誘導し、コントロールするか、ということである。現状は、たとえば親が子供に子供室を与えると、そこで生活を子供に任せっきりにしてしまい、子供室が「聖域化」してしまっているケースが多い。そこからさまざまな問題が発生してくる。

とりわけ、現在の子供室の多くに、携帯電話やパソコンのインターネットなどのように、親を媒介せずに直接に他人や社会と接触できるツールが持ち込まれていることに注目する必要がある。また、パソコン等でのゲームが子供室で行なっていることにも注意を要する。このことから、つぎのような問題が起こっている。

- ① 社会の危険から最も守られているべき家庭の中の、その子供部屋で、インターネットの危険なサイト、俗悪なサイトに、親も知らないうちに児童・生徒が晒され、あるいは時には児童・生徒が自ら積極的に関わっていつている。例えば、学校裏サイト、ネットいじめ、アダルサイト、暴力サイトなど。

学校裏サイトを携帯電話やパソコンで児童・生徒が操作する場所、ネットいじめ等を発信している場所は、多くの場合、子供室からであろう。

- ② 子供室は、ゲームソフトなどによるテレビゲームや、インターネットゲームなどを、親からの干渉がなく心おきなくできる場所になりがちである。そこで長時間ゲームに夢

中になることは、岡田尊司『脳内汚染』（文春文庫）や草薙厚子『子どもが壊れる家』（文春新書）に紹介されているような、登校拒否や深刻な精神障害、暴力事件、殺人事件を引き起こすことにつながる。

- ③ 携帯電話依存症に陥る。携帯電話依存症は子供室でつくられ、そこで増幅されることが多い。そのうちに携帯電話を片時も手放せなくなり、親や兄弟とのコミュニケーションにすら障害が引き起こされている事例も多く聞かれる。

4. 子供室の略史

ここで少し、わが国の子供室の歴史を振り返ってみたい。

わが国で、子供向けの部屋の名称が付いた住宅がつくられた最初は、大正期であろう。当時の都市中産階級の住宅において、「児童室」なる名前の設計がなされた記録が残っている。ただこの動きは、一部の階層にとどまり、広く国民的なものにはならなかった。多くの子供にとっての私的生活空間は当時、「おく」「みせ」「でい」「つぎのま」「6じょう」などといった名前の付いた部屋の、片隅に置かれた平机がせいぜいのところであった。当時の子供にとって、あるいはほとんどの家族構成員にとって、「私的生活」という概念すらが、言葉のうえでも実態においても、市民権を得たものではなかった。

子供室が本格的にわが国において広がったのは、1960年代の半ば以降、高度経済成長が軌道に乗ってからである。受験戦争の中、子供（親）の「勉強部屋」に対するニーズが強まり、1970年頃からの住宅ブームの下、経済的余裕のある家庭を中心に子供室がつくられていった。ここに児童・生徒の私的生活空間が、親の私的空間は未確立なまま、わが国の住宅プランに市民権を得ることになったのである。ただし、部屋のタイプの主流は個室としての「勉強部屋」「子供室」である。この状況は現在に至るまで変わっていない。

70年代の後半になると、この子供室で「不純異性交遊」や「シンナー遊び」が行なわれたこともあり、劇作家の故飯沢匡氏が「子供室害悪論」を発表するなど、かなりの議論を呼んだ。これに対して住宅関係の学界では、閉じ籠らせるのが悪いので子供のための私的生活空間それ自体に罪は無い、などといった反論が起こったりした。

しかし、当時の子供室の「害悪」は、「不純異性交遊」にせよ「シンナー遊び」にせよ、子供室に来ている「友人」が、少しは親に分かっている上での話である。2000年前後以降、IT社会の現在では、前述のように、親も知らないままに子供たちは、子供室で直接に他人や社会と接触しているのである。しかもケイタイのキーを押すとか、パソコンのキーボードを叩くだけだから、接触の内容は、簡単には親にも分からない。

このようにして現代の多くの子供室は、家庭の中の「子供の聖域」、親の知らない「異世界」になっていると言っても過言でなかろう。昔のわが国の教育では、「慎独」といって、誰も見ていない一人の時の心と行動に気をつけるようにという教えがあった。いまは、そうした教えもほとんど無いまま、外界の誘惑と圧迫に満ち満ちた子供室に、児童・生徒は一人で置かれることが多くなっている。

現在は、こうした新たなステージに立って、子供の私的生活空間や子供室のことを、真

剣に考えるべき時期になっている。

5. 今後へ向けて

児童・生徒の私的生活空間（子供室）のあり方は、以下の考え方に沿ったものに誘導すべきであろう。児童・生徒とも、このことを家庭科などの授業で議論し、改善してゆくことが求められる。また親に対しても、学校行事などを通じて、積極的に情報提供をすることが必要であろう。

- ① 子供の発達段階、自立（依存）の段階に見合った私的生活空間の与え方をする。子供の個性等にもよるが、通常は、幼稚園・保育園の頃に就寝スペースを親と分離し、中学校の頃には異性のきょうだいと就寝スペースを分離する。高校の頃には個人の生活空間を確保する、といった段階を踏むのが良いとされている。前述の私的空間ミニマムも、この考え方に沿うのが良いと考える。
- ② 私的生活空間のデザイン（空間の大きさや、机・ベッド等の設備の配置、他の空間との繋がり方など）も、子供の発達段階に見合ったものにする。基本は、できる限りオープンな空間とし、閉鎖的なものにはしないことが肝要である。住宅は、家族とのコミュニケーションを良くし、親やきょうだいとの共同の場面を多くすることが、まずは基本である。そのことを前提にした私的生活空間のデザインと与え方にする。
- ③ 子供のプライバシーの確保の程度も、発達段階に見合ったものにする。年齢が進むにつれて、視線のプライバシー、音や匂いのプライバシー、立ち入りに対するプライバシーの順に、必要のレベルが高まってゆく。発達段階からして不必要なレベルのプライバシーまでを配慮することは、却って弊害があるであろう。
- ④ 携帯電話やパソコン、ゲームは、できる限り子供の私的生活空間ではなく、家族共通の場所に置く。発達段階により、私的生活空間にこれらの一部、あるいは全部を置かざるを得ない場合には、本人同意のもとで、有害サイトのフィルタリング機能を付けるとか、ゲーム利用などのルールを定めるとかを行う。現在、学校への携帯電話の持ち込みが議論されているが、それよりもむしろ家庭における携帯電話やパソコン、ゲームのあり方のほうが、前述のように、影響範囲が大きいと考える。このことを「家庭の問題」と片付けるのではなく、学校サイドでも、個々の児童・生徒やその集団社会での問題として、積極的に関わってゆくことが求められていると思う。